

## 刀と銃口

稲宮 健一

岩倉使節団が欧米に派遣されたのが明治四年、その時の写真では岩倉具視の頭に鬚が写っている。かつての社会の因習を変えるのはなかなか容易ではない。既に変わった時点から、過去を見ると古い因習に囚われているのは滑稽のように見えるが、因習に染まっている方から見ると、馴染みから来る心の安定は簡単に消え去ることは難しい。

終戦まで、何らかの公式な写真に写っている将校の多くは日本刀を携えている。刀に誓って国に忠誠を尽くす意味か。勿論、かつての武士の帯刀は明治九年の廃刀令で廃止されたが武家社会の精神は残っていた。刀の第一義的意味は相手を倒すか、倒されるかの道具である。武士は相手に勝つため刀を磨いた。刀は相手を倒すすると同時に、倒されることもある。それでも刀を使うのは倫理的に正当性があると確信するとき使われ、また、自ら落ち度があるときは自分に向かってでも使われた。

戦う手段に、銃砲がある。アフガニスタンのタリバンの兵士は銃を肩にかけ、トラックに集団で乗っている。銃は集団で使われ、標的は集団であったり、銃を持たない群衆であったりする。かつての狩猟の弓が銃に代わったように思える。余程銃を持っている側に高い倫理が備わっていない限り、単なる暴力になる可能性がある。銃では自分の内面に向かって倫理的に正しいと問うて使う心理状態が働かない。

ユーラシア大陸の中央に位置する乾燥地帯はかつての遊牧民が活躍する広大な平原であった。彼は馬上で弓を使い、羊を追う草原の恵みで生活していた。十二世紀にこのような生活パターンを持つモンゴル帝国に制覇されてきた。今でもその名残りを見る。この時期に生きた農耕民は生活の糧を得るため、水を制御し、食物の生育を自分の手で行った。文字を使い、計測を行い、知らず知らずの内に学術の基盤が構築されていった。やはり中村哲医師のように自らの糧を得るため一歩一歩生活基盤を構築して行く学習の心得が必要ではないか。